

こころの便り

第211号

平成29年10月

〒679-1434
兵庫県たつの市新宮町大屋六六ハ一十二
株式会社新宮運送グループ
代表/木南 一志
kininami@shingu.co.jp
電話0791-755-1212

甘えるな

夏は終わり、確実に秋から今度は冬へと季節は移りゆきます。夏の疲れが出やすい秋、健康には自制が必要です。自制をしない北朝鮮は大きな問題となつて、イランも同じような形でのミサイル実験をおこない、いつ何が起きるかわからない世界情勢となつてきました。もしかすると人類滅亡の危機も起きてしまうかも知れないからこそ、いまの生き方が大切と思えます。

ふと、「甘えるな！」と喝が届いたように感じました。これは、誰の声かわかりません。今年亡くなった大切な人からも知れませんが、心の中で生きるもう一人の自分からの声なのかもしれません。「甘えるな」という声を自分に投げかけてみると、シヤンと背筋を伸ばさねばと感ずることができそうです。

厳しい現実に向き合いながら、人はそれぞれの人生を生きています。他人を見て、羨みながら生きてみても、自分をだました憎き奴を恨んでみても、人生は同じ一回しかありません。誰にとつても一回限りの人生なのです。私たちの先祖はどちらかというところ、その人生をお氣楽に好きなことだけをして生きていくことを、善しとしなかつた人が多かつたのだと思えます。

江戸の末期に黒船が来て、日本中が大騒ぎになりました。わずか数年で近代化を果たしたニッポン。世界の大国ロシアと戦争をして日本が勝ちました。しかし、白人社会との確執は消えず、大東亜戦争という、勝てるはずのない戦争へと向かわざ

るを得なかつた我が国の歴史。

戦争を繰り返してはならない。誰もが賛同できることです。しかし、私たちの国は誰が守るのか。憲法改正もできずに、「戦争反対！九条守れ！」だけを大声で唱えて、世界平和はやってくるのか。自分達で汗して、自分たちの国は守るといふ気概がなければ、ゾウの大きな足が小さなアリンコの命を踏みつぶすかのように消し去られてしまう現実が目の前にあるのです。

マスクミを中心にして日本の国を貶めるようなウソに限りなく近いようなニュースが流れるたびに、戦前の朝日新聞が戦争を賛美したような記事を書き続けていたという事実を思い起こすのです。

今年度から業界の役職を拝命して感じていることは、日本の法律や仕組みが古くなつたことでギクシヤクしてしまい、時代の流れが速過ぎて法律をいくら増やしても間に合わないということだ。

本来あるべき姿は、人として立派な行動のできる誇りある日本人が一人でも多く存在することであらうと思えます。大切なことはどこまでも大切にして、時代とともに変えなくてはならないことは勇氣をもって変えていく。仕事の上でも、人生の上でも、心得ておくべきことなのではないでしょうか。

被災地にこころを寄せながら

木南 一志 拜

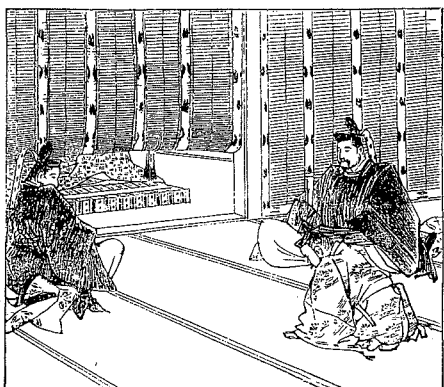
NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ方々の力で、皆様にお届けさせていただいております。

尋常小學修身書 卷五 兒童用

第三課 忠義

後醍醐天皇の御代に、鎌倉の北條高時が天皇の仰に従ひませんので、天皇は高時を討たうとなさいました。高時は早くもそれを知つて、大軍を京都にのぼらせました。そこで天皇は山城の笠置山に行幸になりましたが、地方の豪族も賊軍の勢に恐れてお味方申し上げる者がありませんので、大そう御心配になりました。

楠木正成は河内の金剛山の麓に住んでおりましたが、天皇の御召をうけ、此の上もない武士の名譽と、勇んで笠置の行在所へまゐりました。天皇は大そう御喜びになり、「高時を討つて天下を太平にせよ。」と仰せつけられました。正成は詔をありがたくおうけして、「賊軍が強くても、謀を用ひて討てば、勝てないことはございませぬ。しかし勝負は戦の習でございませぬから、たまに負けるやうなことがありましても、御心配には及びませぬ、正成さへ生きて居りましたら、御運はきつと開けるものと思し召せ。」と、たのもしく申し上げて御前をさがりました。



(つづく)